

道徳教育と特別活動 ～ “仲良し関係” から “高め合う関係” に～

◆同じ道徳的実践・道徳的行為でも・・・

毎朝、花の水やりをしている小学校2年生の何人かの子供たちに、「どうして毎日お花に水をあげているの？」と聞きました。

Aさん：「だって、さぼったら先生におこられるもん。」

Bさん：「だって、お水をあげないとお花がかれちゃうでしょ。」

Cさん：「だって、お水をあげないとお花がかわいそうだし、学校をお花でいっぱいになりたいもん。」

Aさん、Bさん、Cさんにどのような違いがあるのでしょうか。

◆道徳教育が目指す道徳的実践・道徳的行為

道徳的実践・道徳的行為は、「怒られるから」「褒美がもらえるから」など外的な動機付けによって行われたり、「〇〇をすることは正しい」「〇〇をしなければならない」など知識として知っている、あるいは常識的な判断として行われたりします。そうした道徳的実践・道徳的行為に加えて、道徳教育では「〇〇をしないと心が痛む」「〇〇すると気持ちがいい」という心情面の作用によって道徳的実践・道徳的行為が行われるようになることをねらいます。

そして最終的には、道徳的実践・道徳的行為が当たり前のこととして、自然な振る舞いとしてできるようになることを目指します。

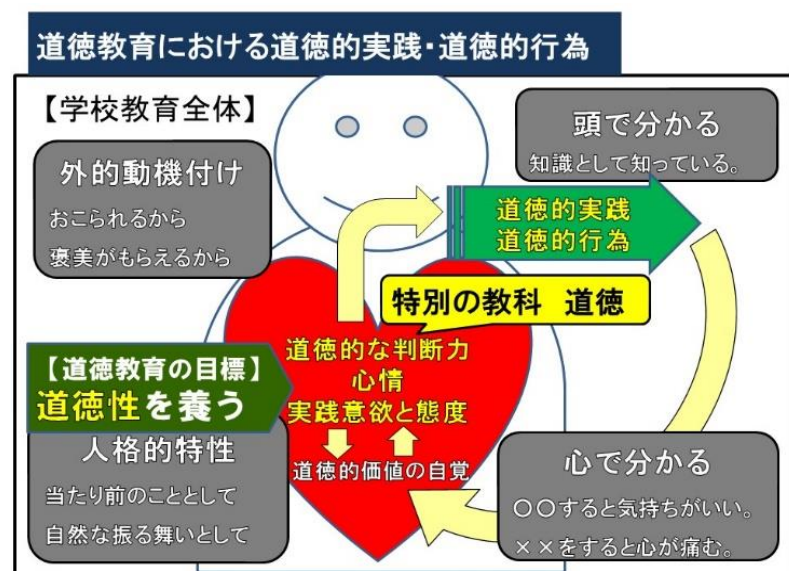


図1 道徳教育における道徳的実践・道徳的行為

◆「道徳の時間」が「特別の教科 道徳（道徳科）」になっても本質は同じ

そうした道徳教育の要になるのが「道徳の時間」で、平成30年度の学習指導要領改訂で「道徳の時間」は「特別の教科 道徳（道徳科）」に変わります。今回の改訂で、文言の整理、指導法の提示があり、道徳の教科書ができるようになって道徳の評価をすることが加わりますが、本質的な部分での変更はありません。これまでと同様に、道徳教育では学校の教育活動全体として道徳性を養い、要となる週1回の道徳の授業で道徳的価値の自覚を促し、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育成することになります。

◆「何を学ぶのか」を明らかに（問われる教師の“道徳的価値”の理解度）

道徳の「教科化」の議論の中で、これまでの道徳の授業の問題点として場面発問が大きく取り上げられました。そして、テーマ発問、考え議論する道徳、課題解決型の道徳など、様々な指導法が示されました。私は、この一連の議論を通して、場面発問自体に問題があったのではないかと考えています。これまでの道徳の授業の問題は、学ばせたいところに終着させる授業ができなかったことに問題があったのではないのでしょうか。それは、教師が学ばせたい道徳的価値の理解を十分に深めていなかったことが原因だと考えます。今後、様々な指導法による授業研究が盛んになるとと思いますが、その授業で子供たちは「何を学ぶのか」を明らかにすること、そのためにその授業で取り上げる道徳的価値を教師が十分に理解することなしに、根本的な問題の解決に至らないと感じています。

◆「どのような力が身に付いているか」を明らかにしたい特別活動

遠足や運動会などの学校行事、委員会活動や縦割り活動などの児童会活動、学級会や係活動、当番活動などの学級内での活動、他にも給食指導や清掃指導など、特別活動は日本の学校教育を特徴付ける教育として、諸外国の教育専門家から高く評価されています。そして、「なすことによって学ぶ」ことを教育原理としている特別活動では、よりよい生活や人間関係の築き方、自己実現の図り方などを、子供たちは体験的な活動を通して学んでいきます。しかし、様々な場面で多くの力が複合的に発揮されて成り立つ活動であったり、学校生活の日常として当たり前に行われる活動であったりするために、特別活動においてどのような力が身に付けているのか、教師が気づきにくいという面があります。

◆特別活動における道徳的実践・道徳的行為

特別活動における様々な活動を道徳的視点で捉え直してみると、実に多くの道徳的実践・道徳的行為が行われていることが分かってきます。例えば、飼育委員の動物のお世話をするという活動では、「生命尊重」「勤労」「協力」、縦割り活動では、「思いやり」「信頼」「感謝」という道徳的価値とつながる実践や行為がたくさん行われています。

しかし、ここで重要なのは、せっかく道徳的実践・道徳的行為が行われていても、それに対する価値付けがないと意味のあるものとしてそれぞれの子供たちの中に残っていないということです。「活動あって学びなし」という言葉がありますが、そうした状態にならないための手立てとして、道徳的な視点を持つことは有効です。教師が道徳的な視点で子供の活動の様子を観察したり表現したものを読み取ったりすることで、子供の道徳的実践・道徳的行為に対する価値付けが行われるようになります。それが、道徳的実践・道徳的行為を意図した特別活動の場づくりにもつながっていきます。

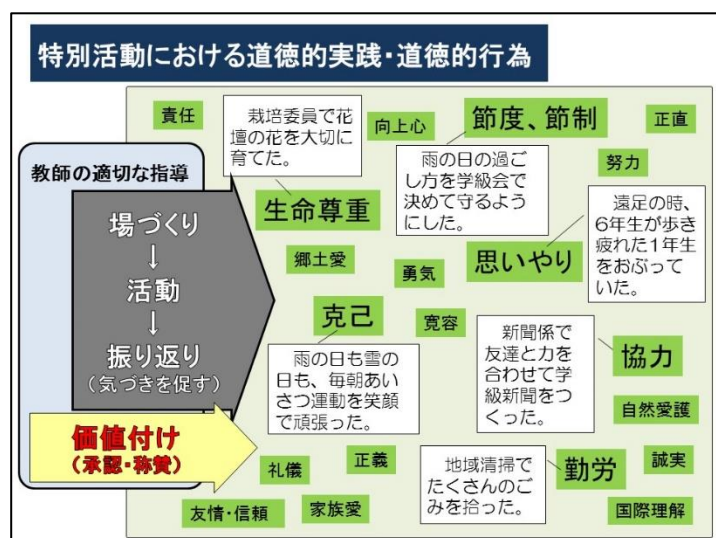


図2 特別活動における道徳的実践・道徳的行為

「活動あって学びなし」という言葉がありますが、そうした状態にならないための手立てとして、道徳的な視点を持つことは有効です。教師が道徳的な視点で子供の活動の様子を観察したり表現したものを読み取ったりすることで、子供の道徳的実践・道徳的行為に対する価値付けが行われるようになります。それが、道徳的実践・道徳的行為を意図した特別活動の場づくりにもつながっていきます。

◆相性が高い道徳教育と特別活動

まず押さえておきたいのは、道徳の時間と特別活動の関係です。道徳の時間では、道徳的価値の自覚を図り、道徳的実践・道徳的行為につながる道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育成します。そして、様々な集団活動や体験的な活動が行われる特別活動には、多くの道徳的実践・道徳的行為を行う機会と場があります。そうしたことから学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育ですが、特に特別活動との関連が重視されています。しかし、道徳の「教科化」の議論の中で、道徳の時間で学んだことが十分に道徳的実践・道徳的行為につながっていないのではないかという指摘から、今後さらに道徳教育と特別活動の関連を密にしていくことが求められています。関連を密にするということにおいては、具体的に、特別活動における活動の振り返りを学級活動で行うのではなく、「特別の教科 道徳（道徳科）」で行うことが考えられます。

◆「特別の教科 道徳（道徳科）」での特別活動の振り返り

学級活動での振り返りであれば、活動を振り返って大切にしたいことを見だし、それを今後の生活にどのように生かすかを定める授業展開になるでしょう。特別活動における活動の振り返りを「特別の教科 道徳（道徳科）」で行うことにより、特別活動で行った道徳的実践・道徳的行為の道徳的意義をじっくり考えることができ、実感を伴った道徳的価値の自覚を図ることが可能になります。しかし、そのためには特別活動で行った道徳的実践・道徳的行為から「何を学ぶのか」を明らかにし、取り上げる道徳的価値について教師は十分に理解を深めておく必要があります。そうした活動の振り返りによって道徳的実践・道徳的行為が価値付けられ、「なすことによって学ぶ」特別活動での学びが、質的にも量的にもより充実したものになっていきます。